身世打鈴

古山高麗雄

身世打鈴

シンセターリョン

古山高麗雄

中央公論社

身世打鈴（シンセターリョン）
定価一二〇〇円
昭和五十五年九月十五日初版印刷
昭和五十五年九月二十五日初版発行
著者　古山高麗雄
発行者　高梨茂
印刷所　三晃印刷
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
振替　東京二―三四
©一九八〇　検印廃止

身世打鈴

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

身世打鈴（シンセダーリョン）は朝鮮語である。自分の不幸な身の上を語る嘆き節のことらしい。

私はこの言葉を、李恢成さんの「砧をうつ女」で知った。

「砧をうつ女」は昭和四十六年に芥川賞を受賞した小説だ。当時、誰だったか批評家が、身世打鈴という言葉を取り上げて、うつくしい言葉だとなにかに書いていたのを読んだ憶えがある。

その次の年に、むくげの会編『身世打鈴』という本が東都書房から出版された。この書名のもとも、「砧をうつ女」にあるのかも知れない。

同書は、在日朝鮮人女性の身上話の聞書集であるが、むくげの会は、日本人の朝鮮問題に対する姿勢をただす手懸りにしたいという動機から、聞き書きを始めたのだという。

むくげの会というのは、同書によれば、六人の婦人グループである。同書には、十二人の在日朝鮮人女性の身上話が、本人の語りとして掲げられ、そのあとに、「記録の背景について」とい

う題で、日本政府と日本人の、朝鮮問題に対する間違った姿勢をただすための長文が続いている。

この婦人たちは、聞いた話の背景を理解するために、朝鮮の歴史を調べたり、朝鮮語の勉強を始めたり、現実に起こっている朝鮮問題に対処するための勉強会を開いたりしているのだという。

年齢も、仕事も、生活環境もさまざまに異なる六人だが、「聞き書き」をするという一点で意見は一致している、と書かれている。

「記録の背景について」には、明治以来、日本が朝鮮に対して行なった暴虐暴戻について、いろいろ書かれている。

朝鮮に対する脅迫、暴力、略奪、差別、蔑視。その限りを尽くして来て、その傷あとに無頓着な日本人に「告発を感じる」という。

「姿勢をただす」だの、「問題に対処する」だの、「告発を感じる」だの、そういう正義運動家の言葉をこの婦人たちは振りかざす。

叩けば埃りの出る体という言葉があるが、朝鮮や中国や東南アジアの人々に対して、日本は、叩けば、限りなく埃りの出る国である。そして、私自身、叩けば埃りの出る人間である。だから私も、正義運動家と同じように、国や人を叩いて、埃りを出したくなるのだけれども、私がそうするのは、おそらく、疥癬かきが瘡蓋をはがさずにはいられないようなものなのであろう。

私は、大正九年に朝鮮新義州で生まれ、朝鮮人を蔑視しながら育った。それは、中学の三年生

ぐらいまでそうだった。その少年時代を思うと、私には心残りのものがある。今でも後悔の念が、チロチロと小さな音を立てていて、その音を消すことはできない。朝鮮人との付合のしそこないを、年端のせいにしてみても、やはりその音は消えない。それにそれは、年端のせいであるより、私の性格のゆえであるかもわからないのである。だから、私は、朝鮮人を朝鮮人だからという理由で、戦前の日本人のように蔑視する者に出会うと、無性に腹が立つ。それは、その者が、私に、少年時代の私の恥部を示すからだろう。

と言って、私は、それではお前は、どんな行為で朝鮮人を蔑視したか、と訊かれると、答えることができない。さいわい私には、そういう行為の記憶はない。私が憶えているのは、その頃の自分の心である。

私自身が、朝鮮人に面と向かって愚弄したり、暴力を加えたりしたことはなかった。

そのような行為をする日本人の少年がいないわけではなかった。ある少年は、相手が朝鮮人の子供だというだけの理由で、打擲し、ある少年は、相手が朝鮮人の子供だというだけの理由で、どぶ川に突き落とした。私は、さすがにそういう少年には反撥を感じたが、私が反撥を感じたのは、粗暴な少年の粗暴な行為に対してであって、日本人の優位に疑問を覚えたわけではなかった。

朝鮮人が受けた差別や理不尽な処遇を、少年時代の私は、どれだけ知っていただろうか。

いったい、朝鮮で生まれ、朝鮮で育ちながら、私には、朝鮮人との交際は、ほとんどなかった。

私が出会った何人かの朝鮮人は、友人として語り合う付合に到る前に、私の前から去った。

小学校一年のときに、李君という少年が、同級にいた。当時、朝鮮の初等学校には、日本人の子弟のための小学校と、朝鮮人の子を教える普通学校とがあった。中等学校は、日本人用を中学校と言い、朝鮮人の中学校は高等普通学校と言った。戦争中、小学校と普通学校とは国民学校と名称が変わり、高等普通学校も、中学校と呼ばれるようになったが、日本人の中学校では、定員の一割だけ、恩着せがましく朝鮮人の入学を許していた。

小学校に朝鮮人の子が入って来たのは、新義州では、後にも前にも、あの李君だけだった。朝鮮人が自分の子を日本人の学校に入れたのは、日本人が中心の国では、そうした方が、上級学校への進学に便利であり、社会で好い地位を得られたからである。

あとで東中学校と名前の変わった新義州高等普通学校は、あの町の朝鮮人の最高学府であったが、新義州中学校は、そこに入学した朝鮮人にとっては、高等学校や大学へ進学するための階段であった。日本人は、朝鮮人エリートのために、一割だけ、門を開いたのである。

李君の親は、どうせのことなら、小学校から息子を日本人と同じ場所で学ばせようと考えたのだろう。そうした方が、息子の将来の出世のためになるとでも思ったのだろう。しかし、息子にとっては楽ではなかっただろう。私は四年ほど前に、「ヨボの李君」という題で、その李君のことを書いたが、李君は、級で最も親しくしていた私から、ヨボの李君と呼ばれて、

「ヨボじゃない」
と反論した。
小学校一年生の私は、なぜ朝鮮人の李君がヨボの李君と呼ばれるのを嫌うのか、理由がわからなかった。
ヨボが朝鮮人に対する蔑称であることを、私は、李君が反撥し、担任の先生に言いつけに行ったりしたことで知った。
李君には、一番親しい私からまでヨボと呼ばれる環境は、居心地の良いものではなかったに違いない。李君は、色白で線が細く、おとなしい少年だったが、日本人の小学校の居心地の悪さを、両親に強硬に訴えたかもわからない。そういう経緯は知らないけれども、李君は、一学期だけで転校した。おそらく普通学校に転校したのだろう。
以来、中学校に入るまで、私には、朝鮮人との付合はなかった。
私の両親は、朝鮮人を侮蔑するようなことを言ったり、したりはしなかったが、看護婦と女中とを、できるだけ内地人でそろえようとした。そして内地人だけでそろわないときに、はじめて朝鮮人を雇い入れた。
私が小学生の頃は、父の開業する新義州病院の看護婦は、すべて内地人であり、自宅の女中たちも、みな内地人だった。

その頃、私が多少とも付き合った朝鮮人といえば、世界館の旗持ちの少年たちであろうか。新義州には、世界館という名の活動小屋があって、外題が変わるたびに、前後に旗持ちを連ねたジンタの宣伝隊が町を回った。

世界館の旗持ち少年たちを相手に、小学生の頃の私は、空地でサッカーをした。私は、優越民族の誇りを勝利で示そうとして、必死になってボールを蹴った。旗持ちの朝鮮人少年たちは、もっとのんきな気分で草サッカーを愉しんでいた。

中学に入ると、五人の朝鮮人と同級として出会い、まず崔君と親しくなった。崔君の父は、道庁の高官であった。官舎に遊びに行ったことがあった。勉強ができて、キビキビした感じの少年であった。私は崔君と親しい友人になりかかっていた。だが崔君は父親の転任に伴い、新義州中学には一年いただけで転校し、それっきりになった。

あとの四人の級友のうちでは、李萬甲君と最も親しくした。しかし、そういう私の思いは、私の一方的なものである。もしかしたら彼らの方では、私と親しくしたつもりはないかも知れない。私は、李萬甲君の家にも遊びに行った。しかし、李君はそれを憶えているかどうかわからない。そして、私が全然憶えていないことを憶えているかもわからない。あるいは、苦い追憶として。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新義州の少年たちにも、人によっては、朝鮮人と親しく交わった人がいる。環境や性格の違いがあって、みんなが一様なわけではない。だから誰もがそうだとは言わないが、私のように、たとえば戦時中の食糧の配給の量が内地人と朝鮮人とでは違っても、当然のように思っていた者が大半だったのだろう。

朝鮮人から言葉を奪い、姓名を奪い、皇民化などという奇態なものを押しつけたことがどんなにひどい行ないであったか、それに気がついたのは、ずっと後になってからだった。

戦争がそれを私に教えてくれたのであった。

私も頭が悪いなあ。人間がコロコロ死に、私自身はと言えば、ぶん殴られ、役立たずだと侮られ、笑われ、死ねもしないのに死にたいと思い、そこまで行かなければ、朝鮮人の心を、想像してみる気持がなかったのだから、と私は思う。

兵隊たちは、朝鮮人慰安婦を愚弄する替え歌を歌った。濁音の発音が巧みでない朝鮮人の日本語を、日本人は口真似して、愚弄するのである。次のような歌詞の歌である。

アメノショポショポフルパンニ　カラスノマトカラノソイテル　マテツノキポタンノパカヤ
ロー　サワルハコチセン　ミルハタタ　サンエンコチセンクレタナラ　カシワノナクマテツキ
アウワ　アカルノカエルノトウシュルノ　ハヤクセイシンキメナサイ　キメタラケタモテアカ

ソナシャイ　オキャクサンコノコロカミタカイ　チョウパノテマエモアルテショウ　コチセンシュウキヲハチミナサイ　ソシタラワタシハタイテネテ　フタチモミッチモオマケシテ　カシワノナクマテポポシュルワ

〈雨のしょぼしょぼ降る晩に　ガラスの窓からのぞいてる　満鉄の金ボタンの馬鹿野郎　さわるは五十銭　見るは只　三円五十銭くれたなら　鶏（かしわは鶏肉をいう関西弁だが、ここではわざと鶏の意に誤用してふざけているのである）の鳴くまで付き合うわ　上がるの帰るのどうするの　早く精神きめなさい　きめたら下駄持って上がりなさい　お客さんこの頃紙高い帳場の手前もあるでしょう　五十銭祝儀をはずみなさい　そしたら私は抱いて寝て　二つも三つもおまけして　鶏の鳴くまでボボするわ〉

これを軍歌の「討匪行」の節で歌うのである。加太こうじ氏がこの歌を紹介して、作者はもしかすると満鉄などにつとめる日本人で、植民地でくらす身を自嘲し、その自嘲を朝鮮娼婦に託してうたったのかもしれない、と書いているが、これは自嘲の歌ではない。思い上がった者が朝鮮人を愚弄した歌である。

私たちの世代の日本人には、その種の揶揄が多かった。そういう日本人に、朝鮮人が反感をいだかないはずがない。

日本人が、欧米人の日本語を口真似をするのと、朝鮮人の日本語の口真似をするのとでは違っている。一方は、愚弄や嘲笑のこもった口真似である。

少年の頃の私には、その口真似を憤る心がなかった。

軍隊に召集されて、私は、新義州で気がつかなかったことに気がつき、新義州で考えなかったことを考え始めた。

軍隊で、正義運動家の言うように、「差別され」「人権を無視され」て、哀しみと諦めの底に降りたとき、たとえば、ある朝鮮人慰安婦の身の上を想像する気になった。

想像する以外には、何もできないが、それまでは、想像する気持もなかったのだ。

朝鮮人慰安婦は、朝鮮人女子挺身隊という名称で徴集された。

その徴集が始まったのは、昭和十六年頃とも昭和十八年頃とも言われている。なにせ、朝鮮人女子挺身隊に関する朝鮮総督府の書類は、終戦時に、証拠を堙滅すべくすべて焼却されたので、それを調べる資料は残っていない。しかし、千田夏光という人が、かつてその徴集にたずさわった人や、女子挺身隊員として徴集された韓国婦人に会って話を聞いてまとめたレポートがあり、それによると、はじめは軍御用の女衒が、警官や面長（郡長）を伴って、農村をまわり、半分騙して娘たちを連れて行ったが、やがて朝鮮総督府が軍の依頼に応じて、女子挺身隊の名称で、強制徴用をするようになったのだという。

私たちに召集令状が来たように、朝鮮の十八歳以上の未婚の女性には、ある日、挺身隊へ徴用の通知が来た。

通知を受けた娘たちは、三日後に、駐在所前に集合させられ、警官の引率でトラックや汽車で京城に送られて、監禁され、さらにそれぞれ配属先に送られたのだという。

慰安婦のための朝鮮人狩りは、内地でも行なわれた。内地での朝鮮人狩りは、県知事が警察署長に命じてやらせた。

戦争中、私がビルマのネーパンという村に駐屯していたとき、そのようにして徴集された朝鮮女性たちが送られて来た。

その頃私はすでに、朝鮮女性が挺身隊の名で徴集され、慰安婦として前線に送られるからくりを知っていた。それは私が最後に新義州を離れたのが昭和十七年で、その頃には平安北道でも、強制徴用が始まっていたからだろう。

そういう徴用があることを私に教えてくれたのは、私の家——新義州病院に勤めていた桂国太郎であった。桂国太郎の本姓は朴である。その年私は、父が病院を売って内地に引き揚げるというので、家の整理を手伝うために、東京から帰ったのだった。

当時、やもめになった父は、私をもてあましていた。二年浪人して入学した京都の高等学校を退学した私は、劇作の勉強をすると称して、東京で無為徒食の暮らしをしていた。新義州に帰る

ことにした頃の私は、新宿の旭町で、二畳の部屋を借りて、貨物駅前の小運送店の店主に食わせてもらっていた。井上というその人は、『わが心のムーランルージュ』を書いた横倉辰次という人の言によると、「春画と淫本を蒐集していたつまらない男だったが、いつの間にか菊岡久利は井上をインテリに仕上げてしまった。永井荷風、谷崎潤一郎、久保田万太郎の初版本のマニヤに仕立ててしまい、芸術演劇の理解者と錯覚させて劇団を作らせた。これが珊瑚座である」とくそみそであるが、横倉氏風に言えば、菊岡久利さんは井上さんを、私のパトロンにも仕上げたのである。私は、菊岡久利さんに井上さんを紹介され、井上さんから、「食わせるぐらいのことはしてやらあ」と言われた。

私はその言葉に甘えて、毎日新宿でぶらぶらしていた。井上運送店に出かけて行っても別に仕事はないので、将棋を指したり、貨物駅の構内に積まれている井上運送店の荷物の上に莫蓙を抱いて這い上がり、昼寝をしたりした。昼寝をしていても、そこに人がいれば盗難防止の役に立つから、そうでもしていろと言われた。

そのような私は、父にしてみれば、どうしようもない困った息子であったろう。父は私に、芝居などという水商売から足を洗って、どんな学校でもとにかく学校に入り直して、まともな道を歩けと言ったが、私がもう、父の言うまともな道にもどりそうにないことを、父は知っていただろう。そしてそのような私が、病院の整理に帰って来ても、父は重宝には思わなかっただろう。

私は、新義州に帰っても、崩れた生活をした。桂国太郎を誘って毎晩飲みに行った。前もって、窓の鍵をはずしておいて、明け方、その窓から家に入った。

桂とそういうことをしながら、私は、女子挺身隊の話を聞いたのだろう。

ビルマのネーパン村に彼女たちがやって来ても、私が彼女たちを求めなかったのは、朝鮮人狩りに対する反撥もあってのことだったかも知れない。そういう女たちを、争って抱く気にはなれなかった。その頃の私は、やたらにそういうことばかり考えて、自分の殻に閉じこもっていた。

しかし、今になって思うと、そうムキにならずに、順番を争うのはいやだが、お茶をひいているブスでもいれば、上がってもよかったような気がする。

もしかしたら彼女は、身世打鈴を聞かせてくれたかも知れない。

わたしはね、結婚の約束をしていた男がいたのよ。ところがその人、徴用で内地に連れて行かれた。男は、泥棒つかまえるみたいに労務報国会がつかまえに来るんですよ。労務報国会の人は、自動車に乗って来て、男をつかまえて、車に乗せて連れて行く。みんな棒を持っているのよ。こわいよ。いつ来るかわからないのよ。急に来るから逃げられない。巡査も一緒に来たよ。屋根のついたトラックに乗って来て、人見たら棒で叩いたり、お尻を蹴ったりして追って行く。着物取

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com